

汽水域研究会 News Letter

例会参加報告

汽水域研究会第4回例会（松江）

汽水域研究会の第4回例会が、2016年1月9日～10日の2日間、島根県松江市の労働会館で開催されました。今回も例年と同様、「島根大学研究機構汽水域研究センター第23回新春恒例汽水域研究発表会」との合同開催でした。

開会に際して、秋重幸邦島根大学企画・学術研究担当理事／研究機構長から、今回多くの汽水域関係者が松江に集ったことは、汽水域研究センターの設置以来、地域における汽水域研究が地道に培われてきた成果でもある。平成29年度からは汽水域研究センターは第3期目に入るが、大学の運営交付金が年々削減されている中、汽水域研究センターについても台所事情が厳しくなっている。このような状況ではあるものの、「島根大学には汽水域研究がある」と言われるように、社会からその取り組みが認められ、松江から世界へ情報発信していけるよう活動を深化させていってほしいとの挨拶がありました。

今大会では、シンポジウムとスペシャルセッション、6件の常設セッションが生まれ、計46件の研究発表が行われました。北海道や韓国など遠方から来られた方もあり、2日間で延べ220名の参加者がありました。また、市内の居酒屋で行われた懇親会には57名が参加し、夜遅くまで汽水域談義に花が咲きました。



今回初めての試みとして、「汽水域研究会会長賞」と「汽水域研究センター長賞」が授与されましたが、これは学生が行う発表を評価対象とし、その研究意欲の向上と若手人材の育成を狙ったもので、今回は19件の発表が評価対象となりました。投票は学生以外の参加者が行い、内容や独創性、発展性、できばえの各項目について評価を行います。投票の結果、それぞれ鈴木舞さん（島根大院総理）「断続的な貧酸素曝露時のヤマトシジミ貝殻内環境について」と梅田隆之介さん（島根大総合理工学部）「隠岐島後重栖湾の最近の環境変化」が受賞者に選ばれました。

汽水域研究会の活動の輪と会員相互のネットワークも、その中心地の松江から徐々に全国へと広がってきています。年2回の大会を継続して開催出来ているのも、これらが上手く機能しているからだと思います。

（栃木県立博物館・河野重範）

国際会議参加報告

国際会議「Geospatial Technologies and Wetland Management」に参加して

2016年2月25日～27日にインド・Andhra大学で開かれた国際会議「Geospatial Technologies and Wetland Management」に参加しました。アンドラプラデシュ州の沿岸にKolleru湖と呼ばれる水域があります。名前こそ湖ですが、航空写真などから分かるように現在は魚の養殖池が無数に水域を分割する状況で、当地では大学、州政府などが環境修復に取り組んでいます。今回、Andhra大学のラジェンドラ・プラサド教授がリーダーを務めるプロジェクトの一環で表題の国際会議が行われることになり、2003年に島根大学汽水域研究センターのVisiting Professorを務めていたナゲスワラ・ラオ名誉教授から講演の依頼を受けました。

国際会議はアンドラ大学CSBOB (Center for Studies on Bay of Bengal) の会場で、学長も参加した開会式から始まりました。最初に登壇したオランダ・Wageningen大学のHenk Ritzema博士によるKey Note「Water management in lowland ecosystems: concepts, dilemmas and some examples」では、低地の水域が近年では気候変動、生息地の分断化、過度の利用によって回復力を失っていると述べられました。3番目のナゲスワラ・ラオ名誉教授の講演では、コアの花粉分析などからKolleru湖が完新世初期から中期に沿岸汽水湖として存在していたことが示されました。Tea Break、LunchではCSBOBのオープンスペースでチャイやサモサなどが振舞われました。



写真1 アンドラ大学CSBOB



写真2 チャイとサモサで休憩

午後のセッションでは倉田が「Nature restoration and basin management in Lakes Shinji and Nakaumi in Japan」として日本最大の汽水域である宍道湖と中海のこれまでの経緯と現在の環境変化について紹介しました。後の意見交換で分かったのは、Kolleru湖の流出河川である川の河口の付け替えにより塩水の遡上が懸念されることについて、宍道湖と大橋川の事例が参考になったとのこと、また市民が環境修復事業を提案して海藻の肥料化などの事業を実践していることが興味深かった、などでした。

2日目も引き続き、Kolleru湖に関する様々な研究発表が行われ、プロジェクトの裾野の広さを感じさせるものでした。3日目のパネルディスカッションでは、宍道湖と中海の経験から、長期的なモニタリングが過去から現在まで起こっていることの把握に欠かせないこと、そして将来に何が起こるか予想するには長期的なモニタリングが必要であることを指摘し、関心の高い市民や漁業者と連携して環境修復に取り組むことの大切さを述べました。全体を通して、水域に対する人為的影響、劣化した環境の修復手法、学際的および社会的な協働の取り組みの必要性等、世界各地に同様の構造の課題があることが改めて認識できました。

(島根大学・倉田健悟)

大会案内

汽水域研究会2016年（第8回）静岡大会のご案内

汽水域研究会2016年大会は2016年10月8日（土）・9日（日）に静岡で開催します。

静岡県は、日本一深い湾の駿河湾から日本一高い山の富士山まで、その標高差6,000mをこえる比類なき地形に、多様な生物相が広がっています。県西部には、関東以西の太平洋岸で最も面積の大きい“汽水湖”浜名湖があり、ウナギやカキの養殖が盛んにおこなわれています。

2016年3月に、静岡県初となる県立博物館「ふじのくに地球環境史ミュージアム」が開館しました。会場のひとつとなるミュージアムは、統合高校空き校舎を改修した建物が特徴で、県内の豊かな自然環境から、自然共生の未来の豊かな社会の設計を考える場となっています。高校時代の机やいすを活用した独特な展示手法が、アート系の雰囲気も漂う新感覚の教養空間を生み出し、開館14日目にして来館者1万人を達成しました。



写真1 ミュージアム外観



写真2 展示室3「ふじのくにの海」

本大会では、県水産技術研究所浜名湖分場およびミュージアムを会場として、浜名湖の現状課題や利活用等を議論するシンポジウム等の講演をはじめ、浜名湖周辺地域でのエクスカージョンや、ミュージアムバックヤードツアーなど多彩なプログラムを企画中です。みなさんのご参加をお待ちしています。

詳細は汽水域研究会ホームページやメーリングリストで随時アナウンスしますので、お楽しみに！

(ふじのくに地球環境史ミュージアム・山田和芳)

情報

● 関連学会の2016年度大会

日本沿岸域学会平成28年度全国大会

開催日：2016年7月16日（土）～7月17日（日）

開催地：高知工科大学永国寺キャンパス教育研究棟

2016年日本プランクトン学会・日本ベントス学会・合同大会

開催日：2016年9月7日（水）～10日（土）

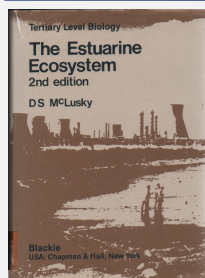
開催地：熊本県立大学講義棟

2016年度日本陸水学会第81回大会

開催日：2016年11月3日（木）～11月6日（日）

開催地：琉球大学農学部

おすすめ書籍



「The Estuarine Ecosystem 2nd edition」 by D. S. McLusky (1989)

本書は汽水域の生態系に関する基礎的な知見から汚染問題・維持管理までの確に幅広く解説する教科書である。四半世紀を過ぎた現在でも、依って立つことのできる必読本と言える。

汽水域研究会ニュースレター第2号において、汽水域研究会の英語名についての議論がなされた時、McLusky による Estuary の定義が「汽水域」を最もよく表しているのでは、という意見があった。本書は1999年に和訳が出版されており、英語版と日本語版の両方を読んで勉強することができる。2004年に第3版が出版された。

新事務局長就任にあたって

2015年10月の汽水域研究会（東北大会）から島根大学の倉田健悟事務局長に代わり、新しく汽水域研究会の事務局長を拝命致しました広島大学の作野です。2010年1月に発足したこの「汽水域研究会」も、早くも7年目に突入したということになります。発足した当時、私は島根大学汽水域研究センターの第一期修了生という縁もあり、同研究会の「情報幹事」として、NEWS LETTERの立ち上げに関わりました。その後も、他の役員の方と汽水域研究会の発展に様々な提案や行動をしてきたつもりです。本研究会は、今では約100名もの会員を有する研究会になり、年1回の総会・研究発表会（毎年10月）と年1回の例会（毎年1月）を開催し、研究会誌（査読付き）をコンスタントに発行しています。

ここまで読まれた方は、順風満帆な研究会運営がなされているように思われるかもしれませんが、実は多くの問題も抱えております。最も大きな問題は、会員数の伸び悩みと研究会誌「LAGUNA」の投稿数が著しく少ないことがあげられます。この2つの問題は、現在存在する日本の学会が抱えている共通の問題でもあります。例えば、現在の日本の大学や研究所では、査読付き英語論文、かつインパクトファクター（IF）が高い、つまり質の高い論文でなければ、教員は高い評価は得られませんし、教員の採用もされません。このような状況で、査読誌とはいえ、日本語論文は提出しない、またそうするとわざわざ日本の学会にも入らないという悪循環に陥っているのが現状です。

以上のような現状は理解しつつ、私は汽水域研究会のような研究会組織には、別の存在意義があると思っています。それは、「汽水域研究を議論する国内コミュニティ充実の場」と「複雑な汽水域環境のデータ集約の場」としての存在です。つまり、いくら英語論文を書くとっても、そこには仲間やデータがなければ、よい成果は生まれません。この研究会には、そのような場を提供できる素晴らしい仲間とデータを取得できるネットワークが備わっています。この研究会が今後ますますそういった場の提供をしやすくするために、私は事務局長として、様々な取り組みを行っていきたいと思っています。なにかと頼りない事務局長かと思いますが、今後ともどうかよろしくお願い致します。

(広島大学・作野裕司)

会員数 (2016年4月30日)

正会員：83名 (+3, -3)、賛助会員：5名 (0)、
学生会員：25名 (+11)、計：113名
#2015年11月30日からの増減

編集後記

今号よりレイアウトを一新しましたがいかがでしょうか？ 上下のブルーの帯で川から海への変化をイメージしてみました。(倉)

汽水域研究会ニュースレター第13号 2016年5月15日発行 編集・発行：汽水域研究会
〒690-8504 島根県松江市西川津町1060島根大学汽水域研究センター内 汽水域研究会事務局
office.rgbwa@gmail.com 0852-32-6436 (phone&fax)